

「広島原爆と賀茂高等女学校」

高崎 スマ子（当時 30 歳）

昭和二十年八月六日、原爆投下された当時の県立賀茂高等女学校の状態は次のようであった。

四年生は、広海軍空廠に学徒勤労働員されて、もう既に学校にはいなかった。

三年生は、学校の一部を残して広島陸軍被服廠の学校工場となっていて、彼女らはミシン工として白鉢巻も凛々しく、軍服縫製のミシンを学校中唸るような騒音の中に踏んでいた。

二年生は、八月に入ってからだったと思う、四キロ離れた賀茂郡郷田村東子（現在の東広島市西条東子）の、呉海軍工廠火工部疎開工場に勤労働員され、自宅から工場に通勤しはじめていた。

一年生だけは、わずかに残された校舎の一隅で、まがりなりにも授業を続けていた。一年生の授業といっても既に出征中の男子教師はおられず、広空廠に宿泊して生徒の附添教師として出向中の教師もあって、留守番役のわずかな人数の教師が、各自の専門教科の都合で片寄った授業を行っていた。

私は四月から四年生の生徒の附添教師として広空廠にいたが、七月に交代になり帰

校していた。それで私も一年生の授業をしながらも、教科の都合上交代して、二年生の働く東子工場に出向いた。

運命の日八月六日、原爆投下の一瞬は、教科上誰かと交代させられて、私は東子工場に出向いていた時だった。若い将校の短い朝礼のことばが終わろうとした瞬間、八時十五分西方にピカッと閃光を感じた。しばらくしてドーンと大きな音響が伝わり、驚いて見上げた広島上空と思われる空に、果てしなく上へ上へと入道雲のような大きな雲のかたまりが昇っていくのを見た。誰かが「広島のカスタンクに爆弾が落ちてガス爆発したんだ！」と大声で叫んだ。みんな同じように大変だという面持で見守っていた。一たん上がった、そのキノコ状の雲は一日中消えなかったような気がする。まるで悪魔が立上って威嚇するかのように見えて不気味だった。

この東子工場は爆弾を造る火工部の工場で、最近に疎開工場として呉から移されて来たらしい。これからやっと工場の建築がはじまろうとしていた。

彼女らの仕事は、呉から輸送されて山積みされた古い建築資材の中から、一本ずつ引き抜いて来ては、それに数人集まって釘を抜く作業であった。釘を再生して使うということらしい。釘抜きは少ないので、小石でたたいて抜くのが容易ではない。抜けたら小石の上に載せ、別の小石でたたいて真直にのぼした。カチカチコツと、朝から終了時間まで、「もう〇本のぼしたよ」と笑い声を上げながら、箱の中

に直立不動の釘を並べていった。彼女らは真夏の炎天下で、麦藁帽をうつ向けて、汗をタラタラと草の上に落とした。

まだ、西の空に見えている異様な色の異様な形の雲の下で、どんな残酷な地獄絵図が開かれているかは誰も知らなかった。

私は翌日、一年生の授業に学校に帰った。ここで私は多くの情報をきいた。西条駅に下車する人たち、裸同然の焼けただれた被災者の群、通過する車窓にも異様な裸身の焦げた姿、その情報はどれをきいても、見たことも聞いたこともない驚天動地のものであった。

八月六日のピカドンは、日本国民、広島市民の上に、また、やがて広島市に入ってゆく広島救援隊の私達に取っても、碑のように深く彫りつけられた運命の日であったのである。この日から私たちは、世をおわる日まで、恐ろしい悪魔のふり上げた鋭い爪のふりおろされるのを、いつも怯えながら待たなければならないことになったのである。

八月六日の早朝、学校工場のミシン工であった三年生の上田茂子さんは、広島市大手町のおばさんが危篤だというので呼び寄せられ、西条駅から広島に出掛けたきり帰らなかった。それから、彼女の学校工場に欠勤が続き、両親、近親者が広島に出かけて探しているという知らせがあり、学校側も彼女の行方を交代で探しに広島市に出か

けることになった。

八月十五日、校長から命ぜられて、彼女の親しかった生徒と女教師の私たちは、壊滅し焼土と化した広島市に初めて足を入れた。もうかなり遺体は片付けられていても、むごたらしい遺体のそこそこに見られて胸をつかれた。言語に絶する焼跡を、本川収容所、大手町を歩いて日赤病院にと一縷の望みを抱いて、亡き人、負傷者の顔を探して歩いたが、茂子さんは発見できなかった。私たちは絶望の中に帰校した。その後も沢山の人たちが広島市を探されたが、遂に上田茂子さんは帰らぬ人となったのである。賀茂高女生徒としては、予期せぬ哀しい唯一人の最初の原爆犠牲者となったのである。

校長の子息も、広島一中に早朝に出かけたきり夕方になっても帰らなかった。後日似島収容所で発見されて、動けないので負うて連れかえり、長く病床で苦しんだ。

西条町周辺には、広島市へ通学通勤者も多く、六日早朝出かけたきり帰らない人が多く、近親者の広島市焼跡の収容所探しも疲労困憊のありさまであった。それらが、後にどんな影響をもたらすかは、神ならぬ者の知る由もなかった。たまたま幸運に逃げ帰った人も寝ついたきりで頭が上がらなかった。

八月十五日は終戦の日であった。勤労学徒動員は解除された。

八月十七日、いよいよ広島救援隊として出動の日である。早朝から桧山博先生が団

長となり、十一名の教師が、当時の列車は復員で満員の状態なので、西条駅から時間差をつけて、個々の教師が残っては引率して乗車し、広島駅に着いた。

私たちは女学生と、麦藁帽にリュック姿で、七十年草木も生えず、と言われた見渡す限り瓦礫の焼跡を、カッと照らしつける真夏の太陽のもとを、黙々と徒歩で長い列をなして歩いた。現在の日本勧業銀行と思われる石造の建物、その時の東警察へ到着した。私たちは数時間待たされたような気がする。誰も彼も動員中の疲れでリュックに縋って寝ていた。やがて収容所への配分が定まった。場所は、本川小学校収容所、大河小学校収容所、段原山崎町第一高等小学校収容所、白島収容所であった。

私は配分された生徒を連れて、一週間宿泊して看護炊出しに従事せよという指示で、本川小学校収容所へ向った。

かつて私も学生時代四年間住んだ懐かしい城下街だったが、今見れば、国破れて山河ありの感一入で、焼けた電車の残骸、むくろのように残った原爆ドーム（当時は産業奨励館）を見上げながら、人間は営々と営みつくったりあっけなく壊してしまったり、それに引きかえ、広島のカカはどうかろう。あの日は、焼け焦げながら逃げ迷い飛び込んだ人々や死体で溢れたというのに、それらのものをもう過去に押し流して川面は静かに光って流れていた。この時引率した女学生も現在五十五、六才になっているが、この時受けたショック、人間の空しさ、そして悠久なる自然が、何かを教え残

したと思う。赤い瓦礫の下には亡き人々が無数につぶされているようで、異臭と無数の蠅である。相生橋の橋上で、馬の形にうず高い蛆のとめどもなく盛り上がるのを見て顔をそむけた。無慙そのものであった。

爆心地に近い（後で知った）本川小学校収容所は、川べりの鉄筋の建物で、校舎のコンクリートの波状の床の上には、百人位かとも思われる負傷者が並べられていた。一人一人が焼けただれ、ほとんど腐ったいたましい姿は、目をそむけたい惨らしさで、赤チンを全身塗られて目を見開いているようで動かない。ああ目のまわりも口のまわりも傷口も盛り上がった蛆の行列で、おびただしい蠅である。異臭である。これでも人間といえるか、万物の霊長なのか、ひどい！と、私たちは悲しみと憤りに涙がふき出て止まらなかった。国民畏敬の象徴であった奉安庫にも負傷者が数人寝かされていた。既成のモラルの崩壊を感じた最初である。

老医師が一人私たちを待っていた。米俵とバケツの前に人がいて、彼は「八勺のおむすびを作って一個ずつ手に渡してくれるよう」と告げると直にいなくなった。老医師は早速生徒の半分を看護の方に連れて行った。彼女らは看護婦代りに赤チンを塗って上げたり、体を拭いてあげたり、身の回りのお世話をして上げたようであった。

私は直に夕食の支度にかかった。生徒たちは、焼跡に高く噴き上げている水をバケツに受けて米を洗ったが、立っている足の下にも死体がいくつも見えかくれして埋っ

て、腐敗した異臭とおびただしい蠅群に、彼女らは声を上げながら働いていた。

大きな鉄釜（平口）が、運動場に石塊を積んだ即製のかまどの上に載っていた。洗米を入れたが薪が見当たらない。

生徒を連れて木片を探しながら焼跡を回っていると、まさに奇蹟のように、空地に薪が山と積まれて、〇〇〇配給所という建札が見えた。人影一つない瓦礫の中にである。「この辺一帯は、本川収容所に入れられた方たちの住宅があったに違いない、頂こう」と、私たちは威勢よく両手に一把ずつ抱えて引き上げた。

火はドンドン燃えた。急げ急げはよかったが大こげを作ってしまった。上は粥状で下はこげてべりべりといっている。失敗だった。全部火を引いて、粥状の表面を棒で突いて穴をあけて水分の引くのを待った。どうやらふっくらしたところで八勺のおむすびである。柔い少女の手は熱さに真っ赤になった。夢中になって作った。大へんな数である。バケツに入れて彼女らは一個ずつ手に載せて回ることにした。蠅のたかった手にのせて上げるとまた蠅がたかって胡麻塩むすびになる。「早く食べてくださいね」と言っても、返事もなく「生死の分らない状態の人が多い」と報告を聞いた。生徒たちは悲しい思いに顔を伏せながら配給して歩いた。肉親縁者であろうか、枕もとに座って胡瓜の熟れたので、焼けただれた体中をその果汁で撫でまわしている女の人もあった。七輪を持参して炭火でお粥を作り、スプーンで食べさせている母親らしい

人もあった。私は生徒たちに、ただ一人横たえられて目をあけている人には、とくに注意してどんなことでも言われるように手伝って差上げなさい、等と頼んだ。

夕方になると警官らしい人が、生徒に手伝わせて亡き人を砂場に運んでは油を注ぎ燃した。人の最後の燃える火の弱々しさよ！このようにして人間の終末を遂げさせた戦争を生徒と共に憎んだ。将来抵抗する為に牢に入れられるとも反戦運動の妻・母とならねばならぬなどと心から語り合った。

戦後十七、八年も経った頃、町の回覧板で原爆被爆者健康手帳の交付があることを知った。それ以来私は、賀茂高等女学校広島救援隊のメンバーとして出動した三、四年生の彼女らの、手帳申請の証明を続けて来た。

あの時の少女の中には、もう白血病で逝った人、ガンで逝った人もあり、引率教師の中にもある。血便に憔悴し、脱毛し、丸坊主になって一年位頭巾を被っていた人もある。五十五、六才にもなればいろいろと思いがけない病気も出てくる。めいめいが、少女の日垣間見た地獄絵図、あの無慙な原爆被爆者の実体にふれた哀しさを、人間がその惨事を、戦争という名目で行った、ということに言い知れぬ憤りを抱いたことを、八月六日を迎える度に思い出し、火のようにふき上げるものがある。決して忘れてはならないことである。

原爆症の恐ろしさを私たちは知った。私は、救援に従事していながら、今に被爆者

健康手帳を受領していない彼女たちの為に、一人の証明者として、いつも健在で待っていたい。

昭和二十七年の原爆記念日に除幕された、平和公園の慰霊碑の碑文は、「安らかに眠って下さい、過ちは繰返させぬから」と書かれている。

私たち一人一人が、生きている限り原爆の悲惨さを語り伝えて、戦争を知らない子供たちに二度と悲劇を繰返さないように、平和の尊さを学ばせねばならない。